

## 若年性乳がん経験者のライフストーリーからみる病いの受容と生き方

相田 佳那

「若年性乳がん」とは、20代・30代で発症した乳がんを指す。本研究は、先行研究では言及が不十分である以下のことに着目する。若年性乳がんに限定した研究、がん告知から治療過程を経た患者本人の心の変化への言及、周囲の人びととの関係性の変化への言及と、患者ネットワークが果たす役割への言及である。これらを明らかにしたうえで、若年性乳がん経験者がおこなっている状況を再確認し、また、病いを自身の人生の一部として受容するプロセスの一端を示すことが本研究の目的である。

本研究では、主に半構造化インタビューの手法をとった。調査対象者は若年性乳がんを経験した（している）方、調査期間は2017年5月から2017年11月までとした。対象者はSNSで病いを公表している方にコンタクトをとる、または乳がん患者会の各種イベントに参加し協力者を募るという方法で集め、7人にインタビューを行った。また、乳がん患者会の各種イベントにおいては補助的にフィールドワークも行った。

本研究の調査から、以下のことが明らかになった。(1) がんを告知されてから、若年性乳がん経験者は多くの場合、人とかかわりの中で病いに折り合いをつけることができていた。(2) 若年性乳がんを経験した未婚女性は、手術により乳房がなくなること・身体に傷がつくこと、薬により妊娠ができなくなる可能性があることを、恋愛・結婚をするうえでの障壁と捉えていた。(3) 若年性乳がん経験者は病いを受け入れ、前向きに捉えられるようになったのちも、病いを経験して専門的な知識を持つ自分と無知な周囲の人びとの間に生じる認識のギャップにストレスを感じる経験をしていた。(4) 若い世代の女性が罹患する病いということも相まって、患者ネットワークの種類が多様であった。患者ネットワークには闘病記ブログ、患者専用コミュニティサイト、Instagram、自助グループなどがあるが、それぞれにネットワークの特色、メリット・デメリットが存在した。

周囲の人びとのかかわりは、認識のギャップなどの問題で、必ずしもプラスなことばかりではない。一方で、“人とかかわり、病いを語ること”が、病いを癒すプロセスの中でプラスに働くことは事実だ。一般社会で生きる彼女たちを支援していくためには、周囲の病いに対する“適切な”理解が必要だ。“適切な”理解とは、クライマンによると、「一個人の病いがもつ特有の意味」が検討・理解されている状態を指す。周囲の人びとは、若年性乳がん経験者が自身の病いの経験世界を語ることでしか、そこに達しえない。若くしてがんに罹患し、“乳がんサバイバー”として長い人生を歩むからこそ、若年性乳がん経験者は自身の将来を見据え、病いと折り合いをつけること、そして周囲が病いに対して“適切な”理解ができるよう、受動的でなく、能動的に動いていくことが重要なのである。

(指導教員 照山絢子)